



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 其角批点真蹟と問津について   |
| Author(s)    | 今泉, 準一  |
| Citation     | 明治大学教養論集, 242: 61-73  |
| URL          | <a href="http://hdl.handle.net/10291/12236">http://hdl.handle.net/10291/12236</a> |
| Rights       |   |
| Issue Date   | 1991-03-01  |
| Text version | publisher   |
| Type         | Departmental Bulletin Paper   |
| DOI          |   |

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

# 其角批点真蹟と問津について

今泉準 一

## I 黒髮庵所蔵『晋其角採点筆蹟』

### はじめに

昨年（一九八九）八月二十九日、たまたま富山・石川・福井諸県を旅行する機会を得、一日、井波町立図書館を立ち寄り、前から、宇野柏里著『井波誌』に紹介されてある「其角の批点、黒髮庵所蔵真蹟」とあつてその全文が載る一文の真蹟の語に惹かれて、一見したい希望をもっていたが、幸いにもこれが達成された。すでにその内容も同書に紹介されており、また昭和三十八年、俳文学会全国大会で、展示公開もされたらしく、この会に私は参加しなかったが、このようなことから、本点は周知のもので、新出資料という意味合いのものではない。ただ、上述の『井波誌』の記載とあとで照合してみると私が試読したものと一・二相違もあり、また以下に述べるように其角の批点の資料として興味深いものがあり、さらには、この批点が許六の言「予高翁ニ対面せざる以前、晋氏が方へ此頃点を乞句、（略）予がよしとおもふ句ニは点稀にして、いひ捨の句ニ褒美の点あり。今日師の感じ給ふ句、大方一点の句也」（『俳諧問答』、『古典俳文学大系』による）の意も具体的に知られるなど、種々の点において参考になるものがあるので、それらについて簡単

に報告しておきたい。

—

最初に私が書き写してきた全文を左に掲げてみたい。

嵐青

羽遣の一つ間ぬける胡蝶かな

全

拙舌 山吹や人の目のつく肴籠

全

よし野の若あゆか  
木鉗に猶力なし若楓

浪化

あたゝかな物の咲けり櫻欄の花

夕鳥

杜若咲や親子の庭遊ひ

全

蚊遣火や夜道をいそく人の音

芦風

竹の子や無言ではいる

此屋敷

京にて

浪化

汗水に成て押しおふ涼さむミ哉

板敷ハ冷しくなる始めかな 全

薺や大工の出る咳はらい 芦風

白鷺しらぎのうしろ足ふむ野分 芦翠

哉

浪化

水みづの音

名月や魚のはたらく

つくくと達たつ广ひろをなぶる 芦風

火燧ひたいかな

芦葉

とく起て鷹たかの肉見る

寒サかな

作者

不知

鴛の足の筆や水

ばなれ

残考 四句

二字二 乙二

丸五

其角圍

とあるもので、約一一九・三糰×一六・〇糰の右の筆書を掛軸に表装してある。箱入り、箱の上蓋に墨書きで「晋其角採点筆蹟 黒髮菴藏」とある。なお、長四角の中に掉舌とある点印は、朱で、墨書きの批点の上に押さされている。丸も朱印で、これは上掲の位置と同じである。最後の其角とある下に押さされている朱印は判読困難。

## 二

其角の批点で現在知り得たものはつぎの七件である。

- 1 『物見車』（元禄三年九月頃刊）に載る歌仙一卷。
- 2 『祇園拾遺物語』（元禄四年正月に刊記）に載る歌仙初の折裏十二句。
- 3 今治市河野信一記念文化館蔵『宛先不明其角書簡』（元禄四年末と推定）に見られる批点の句締添書。

4 『誹諧吳竹』(元禄六年七月刊記)に載る歌仙一卷。

5 『俳諧塗笠』(元禄十年二月序)に載る歌仙初の折裏十二句。

6 柿衛文庫藏『其角批点懷紙』(「元禄十丁丑」と巻末にあり、発句「けふの月」に載る歌仙一卷。

7 早野家藏『其角点卷』(元禄十六年十月二十一日)に載る百韻一卷(『俳文芸』第十一号)。

この外にもなお発見の可能性は十分にあると思われるが、いまこの七件で見ると、1・2・7で見ると、残考とあるものは無点の句である。なお、以上の七件はすべて俳諧の批点であるが、これはすべてが発句である。この点でも珍しい資料である。しかし、ここでも俳諧の批点と同じ方法をとっていることが知られる。

つぎに「二字二」とあるのは、掉舌とある縦長四角印をさすことが知られるが、これは上掲の1・2・5に見られる。因みに、1では定推敲の三字印も用いられている。後で述べるが、この其角の批点は元禄七年に書かれたものと考えられ、この時点を過ぎて、5までこの印が二字印として用いられていたことが知られる。これが6では、廻雪・新月色・花影上鬮干、の二字・三字・五字印となり、7では、越雪・洞庭月・一日長安花、の二字・三字・五字印および半面美人画の印となる。

さて、元に戻って、つぎに「乙二」とある。これは乙をさすと思われる。全部で四句あるが、このうち二句は二字印の句である。『鳥山彦』に「元禄中頃までも点印なき宗匠多し」とあって「宝井其角は乙点と乙の字を点とし甲の印有」とあり、さらに「元禄卯辰の頃一統に点印を貯へ」とあり、卯辰というと貞享四・元禄元か、元禄十二・元禄十三になる。甲の印の件不明であり、沾涼の言はなお考究の必要があるが、とにかく乙はこれをさすものである。乙の見られるのは、3・4で、6では雁・毛と名称が変わるが、詳細は不明である。3・4と本資料に乙が現れているので元禄四年末から元禄七年まではすくなくともこれを批点に用いていたことが知られる。

つぎの「丸五」は、○の印が五の意は明らかであるが、丸は1・2・3・4にも記され、5以降では○印はなお使用されてはいるが、巻末の句締に記されていない。ただ5のみは句締の記載がない。

掉舌の印の二字、乙、丸の批点様式が以上にことから、5がいま書いたように不明だが、6に変わる以前の本資料の書かれた元禄七年までは、乙が1・2にはなく、3・4には見られるので、この点を考慮に入れれば、元禄四年末から使用されていたことが知られる。本資料は其角の批点様式の変遷が知られる点でも興味深い。

### 三

『井波誌』の下編「浪化上人」の項によれば、元禄七年の、六月廿日とあつて、「江戸の其角より消息来る（推定）」とあつて、浪化宛其角書簡が載るが、書簡中に載る其角の二句から見ても、日付の六月廿一日は、元禄七年と見てよく、従つてこの其角批点もこのとき前後のものと考えてよい。このことは、本資料の句が『名月集』（元禄七年刊）に載っていることから裏付けられる。

『有磯海・となみ山』に見る其角の協力は、その内容を見れば誰の目にも明らかであろう。其角と去来が疎遠になるのは元禄十年閏二月の其角宛去来書簡をその字句を変えて、其角が自編の『末若葉』の跋文に同五月二日付けとして掲載したとき以降のことと考えられる。もちろん、右の去来書簡を見てもわかるように去来は其角の作風が芭蕉と異なることに對する不満を生前の芭蕉にも訴えている。しかし芭蕉没前後またその後の両者の言動を見るとわかるように、俳風の相違とは別に両者の親愛感はずれてはいなかったと思われる。

『となみ山』を見るとわかるように、没後の十月十三日には其角は嵐雪・桃隣と去来の落柿舎を訪ね、ともに芭蕉の往時を偲んでおり、翌年の三月上旬の奥書のある上述の『有磯海・となみ山』を見るとむしろ去来に協力して其角はそ

の稿を送っている感じのものである。これは其角宛去来書簡でも、其角に猛省を促しての一文ではあるが、其角なら理解し得るといふ親近感があつたから、ととればとることもできる文面である。

『浪化宛去来書簡』・『隨門記』（ともに『校本芭蕉全集』による）を見ても、其角宛去来書簡に書かれてあるように、批判は批判として、その力量は十分に認めてのものであることがこれもその眼で見れば読みとれるであろう。浪化も去来も其角は其角として一方で認めている。この批点真蹟はこのような浪化を考へるとき、この十五句は浪化が其角に送つて批点を求め、其角がこれに答へたものであろう。一つにはこのことが知られる点でも興味深い資料でもある。

書体はきわめて端正に書かれ、浪化が書いたものではないにしても、浪化の意を体して浪化側の人が書いたものであろう。これに其角が批点批言を加え、残考以下は明らかに其角の筆蹟である。句稿と批点・批言、残考以下の文字がよく調和がとれて、リズム感に富んだ一書となっている。

内容を見ると、当時の蕉門の主要作家と比すればなお多少の見劣りがする句が多いかも知れない。ただ作品評価には個人差また時代差が多いので、一概に言えないことではあるが、もし許六が見たら、「はじめに」のところて述べたような感想となつたであろう感の否めない感じがある。

とくによく現れている一例を挙げてみよう。嵐青は浪化を中心とした井波蕉門俳諧では最も有力な実力作者の一人といえよう。その作品を見ても、なかなかのすぐれたものが多く（『蕉門名家句集』による）、もし芭蕉が生存していたら、許六までとは行かないにしても、その素直なしかし、意欲的な作風は芭蕉に高く評価された作家となつたかも知れない。ここに記されている三句を挙げる。

1 羽遣の一つ問ぬける胡蝶かな

2 山吹や人の目のつく肴籠



### 3 木鉗に猶力なし若楓

2には二字印がある。しかも「吉野の若あゆか」と添え書きがある。3には丸がある。1は残考である。人によつて鑑賞内容には相違がある。従つてその内実は本当の意味で知り得ないといふべきでもあらう。ただ、2の添え書きで、其角はこの句を読んで、吉野川付近の景が浮かびあがつたことが知られる。芭蕉の句に「西河」の前書で「ほろく」と山吹ちるか滝の音」(笈の小文) (校本芭蕉全集) による) がある。其角もまた吉野を訪ねている。この嵐青の句を見て、そのときの景が思い浮かんだのかも知れない。しかし、嵐青にしてみればただ単に井波近郊逍遙の際の属目で、いわば「いひ捨」の一句に過ぎなかつたかも知れない。これにこれだけの点を貰つたことは意外の感じを受けたかも知れない。

3の句を見てみよう。木鉗は『蕉門名家句集』(『古典俳文学大系』による) によれば「きばさみ」とふりがながある。これは許六の「予がよしとおもふ句ニ点稀にして」とある、稀の部類に入るものかもしれない。若楓の美しさに木鉗の手の一瞬のひるみを詠んだ嵐青にしてみれば、苦心の作であつたかも知れない。しかし、これは単に丸だけである。

さて、1の句であるが、これは残考、無点の句である。この句は「羽遣の」に苦心のある作かも知れない。書斎などで南北両方を開け放して書見などをしていたときのことでもあらうか。「羽遣の」は「胡蝶」にかかる語で俳句ではしばしば見られる語法である。部屋へ思はずに入ってしまった蝶が勝手が違つてやがて一方の窓から出て行く姿を目にしつゝ、野を自由に飛び舞っているさまとは違つた蝶の動きを「羽遣の」の語で歌つたところに嵐青なりの工夫が見られる句といえようか。もしこの句を読んで芭蕉が点を付けるとすればどうしたであらうか。もちろん、知る由もない。

しかし、芭蕉は「俳諧は三尺の童にさせよ」「初心の句こそたのもしけれ」(『三冊子』)「などと」、たびたび言つていた、という。1の句は、一面ではこの条件に適つているとも言える。あるいは平点ぐらひはつけて、もう一工夫ぐらひ

の添え書きとなつたかも知れない。其角が無点にしたのも「もう一工夫」という意味でかも知れない。これも『蕉門名家句集』を見たところでは、この句は他撰集に載っていない。嵐青は素直に其角点に従つてこの句を捨てたのかも知れない。2・3は『名月集』に載っている。以上、本資料は其角の批点様式の元禄七年における実態が知られ、また同時点での浪化・其角の関係もわかり、これを通じて去来・其角の関係も想起され、さらには内容を見ると一種のほほえましさをもつて許六の言が思い起されるなど、はなはだ興味深いものがある。また上述のように筆蹟も雄渾の語を思わせるもので、この点でも私にとつては披見し得た幸運に対しての満足感を感じた。

### おわりに

「はじめに」のところに記したように、本真蹟は、昨年披見し得たものであるが、当時其角年譜作成中であり、この其角批点の件も一項として加えてあつた。ただこの作業もどこかで区切りをつけて、一書にしたいと思ひ未見のものは未見と断つてあとは後日をまつことにしようと考えていた。もちろん披見できればこれに越したことはない。ただ、この一項は、本資料は俳文学会で展覧もされ、翻刻書も出ているものであり、その意味では真蹟を見るところだけだけの興での披見でもあつた。披見した結果は上述の感想を得た。一応の報告の価値はあるかと思ひ、この一文を書き始めて改めて私が写し取つてきたものと『井波誌』とをひきくらべて見たところ、一・二の相違が見られる。上述のような事情であつたため写真に取つてくれればよかつたと後悔したのであるが、このためにもう一度井波へ出掛けるのも当面時間的余裕もなく、いづれそのうちにと思ひ、この稿はそのままになっていた。

これもまったく偶然であつたが、このことをまさに茶呑み話に、渡浩一氏に話したところ、今夏、氏は氏の研究から井波へ行くので、そのときついでに写真にとつてきてあげようとおことばを得た。氏の御骨折により二十六枚のカラ

一写真で詳細に写し取ってきていただいた。これで疑問点を解決、その上に本真蹟を座右において楽しみ眺め得る幸運を得た。この感謝の気持は是非ここに書きとどめておかねばならない。また井波町立図書館の方々にも感謝のことばを述べさせていただかなければならない。最初の披見の際にも、この貴重な書を労をいたわず、自由に披見の場を提供していただき、また渡氏の訪問の際にも氏の話によれば写真撮影がすぐできるように準備して下さっておられたとのこと、とくに直接にこのような御配慮をいただいた係りの方に御礼申し上げます。

## II 問津について

### 『五元集』に

松原に田舎祭や昼休み

の句が載る。すでに旧著『五元集の研究』に述べたことであるが、旧注に「松影にと書きし集有松原よせし画のやうにみゆるなり」とある。上述のように其角年譜作成を心掛け、そのため没後の諸書にもできるだけ当たってみるやうに努めてきたのであるが、「松影に」と書かれた集にはまだ出会っていない。旧注で「画のやうにみゆるなり」とあるやうに、江戸時代の人はかなりの佳句と鑑賞していたようである。

現代では其角の作品はそのいくつかが話題になるだけで、この句などは知る人は稀であろう。寒川鼠骨の提唱で、雑誌『ホトトギス』に載せられた座談形式の「其角研究」と題する『五元集』『五元集拾遺』全句をとりあげての諸家の見解を述べた連載の一集は明治以降のものとして、その全句をとりあげているだけに其角を研究するものにとつては大変貴重なものである。この他に岩本梓石の『五元集全解』があるが、これは付会としか思われぬ解釈が散見され、前著ではことさらに言及することは避けたが、同書を読めばおのずから理解せられると思う。しかしこれらを除けばこれもま

た参考となる書である。

いま、前者の解を抜萃して紹介すると、

「松の生えている原に田舎祭り、丁度いまは午で祭も休んで、人も休んでいる、という祭の光景」(鼠骨)

「いかにも田舎祭ですね」(若樹)

「神主が冠をかぶったまま、握り飯なんかほぼぼっているのが見えるようじゃありませんか」(鳴雪)(現代かなづかいに直す・以下同じ)

これを見ると、かなりこの句を好感をもって鑑賞している。

ついで梓石の解をこの句を知る参考となるのでその全文を挙げると、

末若葉に「問津那須に赴く餞に」とある。

問津とは其角の弟子であることその人の句に「武江に信因の師あり」と前書して

月の風ことにそなたの薄かな

の句があるので知れてはいるが、何処の住だかわからぬ、あるいはこの那須というのが郷里ではなかるうか。旅行中田舎祭に出逢って、そこで昼休みをなさるでしょうという句意である。

とある。

梓石の解の指摘の通りで、この句『末若葉』には「問津那須へ」云々の前書があり、同書には問津の発句が二句載り、そのうちの一句が、この解で指摘している句である。其角の選になる俳諧集で他に『焦尾琴』に発句二が載る。

ところで現在最も正確で詳しい其角の年譜は石川真弘氏編の『蕉門俳人年譜集』の中の「宝井其角年譜」である。Iで述べた真蹟の存在を知ったのも、本書によってであるが、本書の元禄九年六月十二日の項に、「もゝ代草」所載の其角

書簡が載る。

『もゝ代草』（綿屋文庫蔵）の序文の中に

野州黒羽の其流楚舟秋花の三人其余風をしたひ湯仰の頭をかたむけ翁行脚の杖しはらく此地にとゞめられし因みに  
よりに彼細道にもれたる吟其角嵐雪の筆を下せる物を併て年回靈前の莊嚴を添んと

とあるように、芭蕉百回忌追善に其角・嵐青の野州黒羽に残る遺筆をも載せた集である。

其角の書簡は右端に「益子其流所持墨跡写之」と別の手跡で載り、六丁の表裏にわたつて非常に丁寧に其角の手跡を生かしてつぎのように載る。

余無情迄ニ可被思召

せめて饞別之一句を

進申候御在所にて

可預御入興候 晋子

松陰に田舎

祭や昼休ミ

六月十二日

益子又左衛門様 宝井其角

とある。

最初の行の「余無情迄ニ可被思召」は、何かの事情でもあつてか、饞別の句座を設けることもせず、まことに申し訳  
けなく、せめて、ぐらゐの意か。

前に旧注に「松影にと書きし集有」とあるのは集とあるのでこれをさすものではないであろう。

この書簡で知られることは問津は黒羽の人、益子又左衛門が本名であることが知られる。『末若葉』に発句二、『焦尾琴』に発句二（『五元集の研究』で四としたがこれは誤り、ここに訂正をしておく）、其角撰集で見ると、元禄十年ごろから元禄十三・四年ぐらゐまでの其角と交渉のあつた俳人と考えられる。『末若葉』の成つた年月が元禄十年夏以降と思われるので、元禄十年六月十二日と考えられないことはないが、その前年とも考えられる。

またこの書簡は、同じ江戸に居ながら、餞別の会もできぬ状況にあつたためとすれば、この書簡を持つて、問津は其角に逢うことなく江戸を発つたものか。なお、本書簡所持の益子其流は百回忌追善の本書の編著者の一人であるから、同姓の点を考えて、問津の子孫かまたそれに近い縁者と思われる。

以上、I・IIともに、すでに活字文献となつているものの再点検をした結果の再報告であり、これに多少の感想を加えて一文としただけのものである。増補・訂正の御教示を切に希望する次第である。